

## 小林一茶の虫の句にみる作品世界 蚊，蚤，蠅をめぐる

韓 玲姫\*，綿坂 豊昭\*\*

### The Phrase about insects in HAIKU of Issa Kobayashi's Works

Lingji HAN, Toyoaki WATANUKI

#### 抄録

小林一茶の発句の中に虫の句が多いことは周知の通りである。その中でも嫌悪の対象とされる蚊，蚤，蠅の句が多いことはすでに栗山理一に指摘され，それは一茶の負の意識による愛憐の表れとされている。本稿では，18,700 句の一茶の発句の中から虫の季題と句数を集計し，芭蕉，蕪村の虫の句数と比較しながら，栗山理一の先行研究を検証するとともに，一茶の虫の句の作品世界とそれに托した一茶の思想について検討した。

本研究を通して，蚊，蚤，蠅という句材は，一茶が俳諧の世界に入った時には特に注目されていなかったが，故郷に帰住してから特に一茶に意識され，多く詠まれていたことがわかった。一茶が特に嫌悪の対象とされる蚊，蚤，蠅を多く詠んでいるのは，生まれ育った環境と自身の境遇により，常に感じる共感があるからであり，そこには蚊，蚤，蠅に托した一茶自身の姿と当時の心情が込められていた。一茶の人生において蚊，蚤，蠅は，共に生きる存在であり，同じ運命を持って生きる最も重要な存在であった。

#### Abstract

It is well known that there are many phrases about insects in Haiku of Issa Kobayashi's works. Riichi Kuriyama had pointed out that Issa Kobayashi expressed his pity emotion by the negative consciousness through the Haiku about nasty insect (such as mosquito, flea, and fly). This paper inspects Kuriyama's Previous work, and try to understand the Issa's thought from analyzing the kidai and quantity from 18,700 haiku of Issa, and comparing with the number of phrases of the insect of Basho and Buson.

Issa did not focus on the Haiku about mosquito, flea, fly at the begging of entering the world of Haiku. But after he went back to hometown, Issa was particularly conscious and wrote a lot of Haiku about mosquito, flea, fly. Through comparing the environment that mosquito, flea, fly was born and raise and circumstances of his own, Issa thought he had the same feeling with them. So we can make the conclusion that the Haiku about mosquito, flea, fly expressed Issa's statement and feeling for that day. So we can make the conclusion that Issa think he lived with mosquito, flea, fly, and had the same fate.

\* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程

Doctoral Program

Graduate school of Library, Information and Media studies, University of Tsukuba

\*\* 筑波大学図書館情報メディア系

Faculty of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba

## はじめに

一茶俳句の中に小動物に関する句が多く詠まれていることは周知の通りである。かつて栗山理一は、「一茶は数多くの小動物を好んで取り上げている。2万句におよぶ全句から集計したわけではないが、特にしばしば題材となった小動物としては、雁、蛭、蚊、時鳥、蛙、鶯、きりぎりす、蚤、蠅、猫、雀などであろう。この中にはさすがに和歌以来の伝統的な題材もあるが、蚊、蚤、蠅、猫、雀のような俳諧的句題も多い。蚊、蚤、蠅など人間にとっては懐かしく愛らしいものというよりは、むしろ嫌悪の対象とされるものをことさらに選ぶ心理は、人間の場合に乞食や継子をしばしば取り上げる心理と共通するものがある。憎まれ、虐げられるものへの同情は、彼の負の意識による愛憐のねじれた仮託ともいえる」<sup>1)</sup>と、一茶が特に人間にとって好ましく思われない俳諧的句題を多く詠んでいるのは、一茶の継子という負の意識からくるねじれた愛憐の表現であると指摘している。

それに対して、金子兜太は「小動物はもちろん、可憐な女の子、純な少年、弱い角力取などなど、一茶にとっては自分の分身のように感じられていたのである。生きものの命が、じかに、自分の命に伝わるといってもよい。生きものの命に精霊を感じて、徒や疎かに扱えない気持ちになる、といってよい。古代人が、山川草木、鳥獣魚

類のすべてを、生きものとおもい、それに精霊を感じ、カミとおもっていた、かのアニミズムといわれている感応の世界が、一茶のなかに（身体の芯に）、人一倍濃く宿っていた」<sup>2)</sup>と、一茶にとって小動物というのは自分の分身であり、命のある生き物の精霊であるとみている。

確かに、一茶の俳句には「通し給へ蚊蠅の如き僧一人」（寛政句帖、寛4）、「ふくれ蚤腹ごなしかや木にのぼる」（七番日記、化10）、「やれ打な蠅が手をすり足をする」（梅塵八番、政4）などのように、蚊・蚤・蠅などの句題を詠んだ俳句が多く、「蚊や蚤、虱は、一茶の日常にいつもいて、一茶の親しげな眼差を受けていた」<sup>3)</sup>のである。

本稿では、小林一茶の虫の句の中で、蚊、蚤、蠅を詠んだ句を集計し、蚊、蚤、蠅の句が一茶にどのように詠まれているのか、どのような特徴があるのかを考察し、先行研究を検証すると同時に、小林一茶の虫の句の作品世界とそれに托した小林一茶の思想について検討したい。

## 1. 虫の句の統計

本稿では、一茶の類似句を除いて約18,700句が収録されている『一茶全集第1巻発句』<sup>4)</sup>をもとに、虫類の発句を集計してみた。その結果、下記表1のように、地虫、蛭、蟬、茶立虫、灯取虫、尺取虫、蓼喰虫、機織虫など、49種類の季題と、1,695句の虫の句が詠まれていることがわかった。その割合は、全発句の9%を占める。

表1 一茶の虫の季題と句数表

季題	季語	句数	季題	季語	句数	季題	季語	句数
地虫出づ	春	1	虱	夏	1	日ぐらし	秋	11
蛇穴を出づ	春	7	羽蟻	夏	6	法師蟬	秋	3
蝶	春	299	水馬	夏	7	蜻蛉	秋	59
蚕	春	12	紙魚	夏	1	茶立虫	秋	1
虻	春	15	蟬	夏	94	蟬	秋	25
蜂	春	30	蓼喰虫	夏	5	松虫	秋	1
花見虱	春	4	蜘蛛の子	夏	6	鈴虫	秋	4
蛇	夏	18	蝸牛	夏	59	いとど	秋	5
蛭	夏	246	蛭	夏	7	いなご	秋	33
灯取虫	夏	18	みみず出づ	夏	2	機織虫	秋	11
蠅取り蜘蛛	夏	1	蛇穴に入る	秋	42	蚕	秋	113
尺取虫	夏	3	虫	秋	83	ばつた	秋	7
毛虫	夏	12	放屁虫	秋	13	蠼螂	秋	11
子子	夏	16	秋の蝶	秋	8	みみず鳴く	秋	6
蚊	夏	165	蓑虫	秋	7	冬の蠅	冬	4
蠅	夏	97	秋の蚊	秋	4	合計		1,695
蚤	夏	106	秋の蟬	秋	6			

一茶の虫の句における季題の多様さは、一茶がコオロギ、バッタ、キリギリスのように同じ昆虫類を細かく分類したり、蠅と冬の蠅、蚊と秋の蚊、花見虱と虱などのように、季語別に分けて詳しく詠んでいることとかわりがあり、一茶の鋭い観察力が窺える。

一方で、蚊、蚤、蠅のような俳諧的句題は、芭蕉、蕪村の発句にもみられる。

山の姿蚤が茶臼の覆ひかな	芭蕉（延宝4）
蚤虱馬の尿する枕もと	芭蕉（元禄2）
我宿は蚊のちいさきを馳走かな	芭蕉（元禄4）
蠅いとふ身を古郷に昼寝かな	蕪村（安永6）
蚊の声す忍冬の花の散ルたびに	蕪村（安永6）

本稿では、一茶の虫の季題の多様さと句数の多さを検証するために、芭蕉、蕪村と比較してみた結果、確実に芭蕉の発句と認められる作品から842句が選出された『芭

蕉句集』<sup>5)</sup>には、虫の季語が12種類、虫の句が31句見受けられ、伝存する全作品が集成された『蕪村全集第1巻発句』<sup>6)</sup>には、2,911句の発句が収録され、それには虫の季語が15種類、虫の句が136句見られた。一茶、芭蕉、蕪村の発句のうち、共通する季題を下記の通り、表2にまとめる。

表2より、蝶、蛭、蟬、蜚は一茶、芭蕉、蕪村ともによく詠まれる句材であり、蚊、蠅、蚤は一茶には多く詠まれるが、芭蕉にはあまり詠まれていないことが窺える。

また、表1と表2を比較してみると、一茶は実に細かく虫を分類して詠んでいるかがわかる。さらに、全発句における虫の句の割合から見ると、芭蕉は4%、蕪村は5%であるのに対し、一茶は9%詠んでいる。

こうしたことから、現存する発句を見る限り、一茶は俳人の中でも最も多く虫の句を詠んでいたと言えよう。

表2 一茶、芭蕉、蕪村の共通する虫の句の統計表

季題	一茶句数	芭蕉句数	蕪村句数	季題	一茶句数	芭蕉句数	蕪村句数
蝶	299	5	5	蚤	106	2	0
蛭	12	0	2	蟬	94	5	15
蜂	30	0	3	蝸牛	59	1	0
羽蠅	6	2	3	虫	83	0	9
蛭	246	5	21	養虫	7	1	2
子子	16	0	3	蜻蛉	59	0	5
蚊	169	1	34	蟬	25	0	5
蠅	101	1	6	いとど	5	1	0
虱	1	2	2	蜚	113	5	20

## 2. 年次別にみる蚊・蚤・蠅の句の傾向

一茶の虫の句には、蚊、蚤、蠅の句が多い。表1で集計した虫の句1,695句のうち、蚊、蚤、蠅の句（秋の蚊、冬の蠅を含む）は376句である。割合から見ると、蚊、蚤、蠅の句は虫の句の22%を占める。蚊、蚤、蠅の句の中で年代不明な句（15句）を除いて、年次別に集計したものを次頁の表3に示す。

表3の年次別の合計数より、蚊、蚤、蠅の句材は、一茶が先師竹阿の足跡を慕って西国行脚に出発し、東海道から京坂、四国、九州を遍歴した寛政4（1792）年から故郷に帰住する文化10（1813）年までには特に注目されていなかったことがわかる。一方で、文化10（1813）年になって蚊・蚤・蠅の句数が急激に増加し、文政7（1824）年に至るまで増加傾向が継続されていることが窺える。

文化10（1813）年は、一茶が義弟の仙六と和解し、亡き父の遺産問題が解決され、36年間の江戸漂泊の生活を

清算し、故郷に安住した年である。故郷で一家の主となった一茶は、宗匠として北信信濃俳諧寺社中で俳諧師活動をし、やっと余裕のある生活を送るようになる。

そして、翌年には信濃町赤川の富農常田家の娘で28歳のきくを妻に迎え、その間に三男一女をもうけるが、相次いで夭折し、文政6（1823）年には妻きくが病死し、その後も不幸が続くのである。このように、文化10（1813）年から文政7（1824）年にかけて、蚊、蚤、蠅の句数に増加傾向がみられるのは、故郷に帰還した一茶の心情と密接な関係があり、当時の一茶の境地とかわりがあると考えられる。

この時期の作として、一茶48歳より56歳に至るまでの句日記である『七番日記』（文化7 - 15）、57歳の出来事、特に最愛の長女さとの生と死を主題とした句文集である『おらが春』（文政2）、57歳より59歳までの句日記である『八番日記』（文政2 - 4）、60歳より63歳までの最後の句日記である『文政句帖』（文政5 - 8）が挙げられる。

表3 年次別蚊，蚤，蠅の句数表

西暦 (年)	年号 (年)	一茶 年齢	蚊の 句数	蚤の 句数	蠅の 句数	合計	西暦 (年)	年号 (年)	一茶 年齢	蚊の 句数	蚤の 句数	蠅の 句数	合計
1792	寛政4	30	1	0	0	1	1814	文化11	52	7	7	3	17
1793	寛政5	31	4	0	0	4	1815	文化12	53	1	3	7	11
1794	寛政6	32	1	0	0	1	1816	文化13	54	14	3	6	23
1801	享和元	39	0	1	1	2	1817	文化14	55	6	1	1	8
1802	享和2	40	0	1	0	1	1818	文政元	56	16	5	0	21
1803	享和3	41	6	3	1	10	1819	文政2	57	15	3	14	32
1804	文化元	42	1	0	0	1	1820	文政3	58	8	4	3	15
1805	文化2	43	1	0	2	3	1821	文政4	59	10	5	12	27
1806	文化3	44	3	0	7	10	1822	文政5	60	3	15	5	23
1808	文化5	46	8	0	2	10	1823	文政6	61	6	0	5	11
1809	文化6	47	4	0	0	4	1824	文政7	62	15	7	16	38
1810	文化7	48	8	0	0	8	1825	文政8	63	3	7	4	14
1811	文化8	49	3	2	1	6	1826	文政9	64	0	2	0	2
1812	文化9	50	2	4	0	6	1827	文政10	65	2	9	0	11
1813	文化10	51	18	19	4	41	寛政4～文政10		合計	166	101	94	361

### 3. 蚊，蚤，蠅の句の作品世界

一茶が蚊，蚤，蠅に特に注目したのは，故郷に帰住してからであることはすでに述べた通りである。それは，表4に示した「出典からみる蚊，蚤，蠅の句数統計表」のように，一茶の作品集からも窺える。

表4により，蚊，蚤，蠅の句は『寛政句帖』，『享和句帖』，『文化句帖』にみられるが，その句数はあまり目立っておらず，『七番日記』になって際立って多くみられる。『七

番日記』は，一茶の生涯における最大の転換期であり，一茶調の最盛期を代表する<sup>7)</sup>作品であるだけに，蚊・蚤・蠅の句数が最も多く見られるということは，この時期の彼の思想の反映とも言えよう。また，蚊，蚤，蠅の句は，『八番日記』，『文政句帖』のように，晩年の作品集においても一茶に多く詠まれていた。

しかし，文政2（1819）年の作である『おらが春』に蚊，蚤，蠅の句がほとんど採用されていないのは注目に値しよう。実は，文政2年の一茶の作品に『おらが春』のほか

表4 出典からみる蚊，蚤，蠅の句数統計表

出典	年号(年)	一茶年齢	蚊の句数	蚤の句数	蠅の句数	合計
寛政句帖	寛政4-6	30~32	6	0	0	6
終焉日記	享和元	39	0	1	1	2
享和二句記	享和2	40	0	1	0	1
享和句帖	享和3	41	6	3	1	10
文化句帖	文化元-5	42~46	13	0	11	24
化五六句記	文化6	47	4	0	0	4
七番日記	文化7-15	48~56	75	44	22	141
おらが春	文政2	57	2	0	0	2
八番日記	文政2-4	57~59	32	12	29	73
文政句帖	文政5-8	60~63	26	29	30	85
政九十句写	文政9-10	64~65	2	11	0	13
合計			166	101	94	361

に『八番日記』があり、その年に詠んだ蚊・蚤・蠅の句は32句である。

年次別にみると、文化10年に41句、文政7年に38句に続き、三番目に多く詠まれているのである。一方で、『おらが春』と『八番日記』はともに自筆本ではなく、一茶没後に刊行されたものである。

こうしたことより、『おらが春』に蚊・蚤・蠅の句がほとんど採用されていないのは、刊行の意図と構成に関係すると想像される。

本節では、一茶の境地と作品を踏まえ、(1) 自己卑小化、(2) 庶民生活の姿、(3) 家族への憧れ、(4) 愛着と人情味に分類し、蚊、蚤、蠅の句に托した一茶の作品世界を検討したい。

#### (1) 自己卑小化

丸山一彦によると、一茶が俳諧の道を求めるようになったのは、20歳前後とされる<sup>8)</sup>。圀喬、または菊明という名で葛飾派の諸集に入集したという説もあるが、15歳に江戸に出てから29歳の初旅である『寛政三年紀行』までは、はっきりした記録がない。

通し給へ蚊蠅の如き僧一人 寛政句帖(寛4)

これは、一茶が西国行脚を試みた寛政4(1792)年に、箱根の関所を通る時に詠んだ作で、初めて蚊、蠅を題材に詠んだ句である。一茶はこの句で旅中の自分を「蚊蠅の如き」僧に見立てている。

我もけさ清僧の部也梅の花 さらば笠(寛10)  
僧正が野糞遊ばず日傘哉 文化句帖(化1)  
秋の風乞食は我を見くらぶる 文化句帖(化1)  
子ありてや橋の乞食もよぶ蚩 七番日記(化8)  
僧になる子のうつくしやけしの花 文政句帖(政7)

上句のように、一茶には僧と乞食の句が多く見られる。俳諧師の旅姿は僧形が普通で、おおかたは心的な理由より、旅の身の安全と便利への考慮からだ金子兜太は見ている<sup>9)</sup>。

一茶の場合、人々に嫌悪される「蚊蠅の如き」僧に見立て、旅中の自分を卑小化して詠んでいることから、当時の一茶の行脚の境地が推察される。このように、自己を卑小化して表現するのは後年の一茶調とされるが、この時期にすでに芽生えていたことがわかる。

蚊、蚤、蠅を取り上げて自嘲する傾向は、一茶調の完成期とされる『七番日記』において特に一茶の心境が明らかに表れる。『七番日記』は、文化7(1810)年から文化15(1818)年に至るまでの一茶の句日記で、総7,300句の発句が収められている。

その作風について丸山一彦は、「古歌のもじり、先人の句の模倣・摂取、川柳・俗謡からの脱化、俗語・方言何でもござれの傍若無人ぶりで、しばしば詩的燃焼の稀薄な凡作や、あくの強い体臭に悩まされながらも、その夥しい作品の量と、充実しきった作句力の前には、誰しも目を瞠らざるを得ない」<sup>10)</sup>と述べている。『七番日記』に蚊、蚤、蠅の句が141句で最も多く詠まれているのは、この時期における一茶の作風と大きなかわりがあると考えられる。

一方で、この時期の虫の句には、

五十にして都の蚊にも喰れけり 七番日記(化10)  
蚤蠅にあなどられつつけふも暮ぬ 七番日記(化10)  
さはぐなら外がましぞよ庵の蠅 七番日記(化10)  
ふくれ蚤腹ごなしや木にのぼる 七番日記(化10)  
うしろからふいと功者な藪蚊哉 七番日記(化14)  
夜の蚊やおれが油断を笑ふらん 七番日記(化14)

などのように、放浪生活を終えて故郷に定住するが、36年間土地を離れたこともあり、心を開いて語り合える友もなく、蚊、蚤、蠅にまで虐げられる一茶の自嘲的傾向が窺える。

同じ傾向が、一茶の晩年の作品である『八番日記』、『文政句帖』にもみられる。

故郷は蠅すら人をさしにけり 八番日記(政2)  
疫病神蠅もおわせて流しけり 八番日記(政2)  
寝た人を昼飯くひに來た蚊哉 文政句帖(政5)  
庵の蚤子どもに返もとられけり 文政句帖(政5)  
とんだ蚤かくれて人をはかるかよ 文政句帖(政5)  
打れても打たれても来るや膝の蠅 文政句帖(政7)

『八番日記』は一茶の自筆本ではなく、現在あるのは、門弟風間新蔵が書写した『風間本八番日記』と、山岸梅塵が書写した『梅塵本八番日記』であるとされる<sup>11)</sup>。「故郷は蠅すら人をさしにけり」は、文政2(1819)年の吟で、この時一茶は故郷に帰住してすでに6年も経っている。しかし、この時の一茶の気持は、文化10(1813)年の吟である「五十にして都の蚊にも喰れけり」に示されている心境と全く変わっていないことが窺える。つまり、故郷に対する一茶の疎外感、孤独感が、蚊、蚤、蠅を通してさらに鮮明に伝わってくる。

このように、蚊、蚤、蠅を取り立てて自分を卑小化する作風は、西国行脚時代からみられるが、故郷定住後は一茶の独特な俳風として数を増している。そのイメージは、それらの原型と同じく、つまらない、世間に好まれない生き物というものであり、それを通して反映される一茶の気持は、わが身の苦痛な境遇ともどかしさであったと考えられる。



## (2) 庶民生活の姿

『寛政句帖』の作には、次のような蚊の句が見られる。

蚊を焼くや紙燭にうつる妹が顔	寛政句帖(寛5)
只一ツ耳際に蚊の羽かぜ哉	寛政句帖(寛5)
戸迷や蚊の声さぐる木賃宿	寛政句帖(寛5)
人ありて更て蚊たゝく庭の月	寛政句帖(寛5)
雨垂の内外にむるゝ藪蚊哉	寛政句帖(寛6)

一茶は、女性に対する思恋の思いを「蚊を焼く紙燭」の中で浮かべ、旅先での宿泊の状況については、「蚊の声さぐる」木賃宿、「蚊たゝく」庭、「むるゝ藪蚊」の雨垂と示している。これらの句は、蚊、蚤、蠅とともに暮らしている庶民生活の姿が鮮明に浮かび上がると同時に、農民一茶の素朴な感情が読み取れる。

寝すがたの蠅追ふもけふがかぎり哉 終焉日記(享1)

これは、享和元年に亡父をしのんで書いた手記である『父の終焉日記』にみられ、5月20日に父の「臨終」に詠んだ句である。前書には次のように綴られている。

熱は次第に盛にして、朝は淡粉一つばかりもたうべ給ひしが、昼比より御顔のけしきの青々と、目は半ふさぎ給ひ、...中略...あはれ、おのれ命に替へて、一度はすこやかなる父にして見まほしく、たうべたきとの給ふも、あしかりなんと戒メしが、今は耆婆・扁鵲が洒落もとどかざらん。諸天・善神の力も及ばざらんと、只念仏申より外にたのみはなかりき。<sup>12)</sup>

前書の後半に記した「今は耆婆・扁鵲が洒落もとどかざらん。諸天・善神の力も及ばざらん」というのは、釈迦の侍医や戦国時代の伝説中の名医がいくら機知に富んでいてもその力もう届かず、諸天神善神の力ももう及ばないという、臨終直前の父に対する一茶の深い諦めの悲哀が読み取れる。

このような一茶の気持は、庶民生活の姿である「蠅追うも」という表現によって、「蠅を追うことも今日が最後である」、「父が亡くなると蠅を追うこともできない」という切実な思いがより一層映し出されている。

一方、『享和句帖』には蚊、蚤、蠅を通して庶民生活を詠んだ句が多くみられる。

蠅一つ打ては山を見たりけり	享和句帖(享3)
桶あてるちよろちよろ滝や蚊の声	享和句帖(享3)
追れ追れ蚊の湧く草を寝所哉	享和句帖(享3)
蚊のゆふべ坊主にされし一木哉	享和句帖(享3)
蚊一ツの一日さはぐ枕哉	享和句帖(享3)
宵越のとふふ明りや蚊のさはぐ	享和句帖(享3)
風も吹月もさしけり蚤の宿	享和句帖(享3)

草の蚤はらはらもどる火かげ哉	享和句帖(享3)
瘦蚤の矢指が浦の曇り哉	享和句帖(享3)

「蠅一つ打ては山を見たりけり」の句からは、蠅叩きで蠅を打っては青々しい山を見たりする田舎の悠悠たる生活状況が浮かび上がる一方、蠅を一匹打ったら、またどこかで蠅が一匹出てきてそれを打つという庶民の生活の実情が伝わってくる。

また、「蚊一ツの一日さはぐ枕哉」、「宵越のとふふ明りや蚊のさはぐ」などのように、蚊の「さはぐ」声により田舎の閑寂した情景が窺える。

このように、一茶は蚊、蚤、蠅を庶民生活の実情として捉え、貧苦と孤独な江戸生活を描き出したのである。庶民生活の姿として蚊、蚤、蠅のイメージは『享和句帖』からすでに定着していたと言えよう。

## (3) 家族への憧れ

一茶の俳句には、「蚊柱」を詠んだ句が28句見受けられる。

蚊柱や凡五尺の菊の花	七番日記(化7)
蚊柱や草は何なと咲やうす	七番日記(化7)
蚊柱の外は能なし覆哉	七番日記(化9)
今の間に蚊が拵へし柱哉	七番日記(化10)
うかれ蚊の臼となり又柱哉	七番日記(化10)
臼となり柱となりてなく蚊かな	七番日記(化10)
蚊柱をよけゝ這入乙鳥哉	七番日記(化10)
蚊柱が袂の下に立にけり	七番日記(化10)
蚊柱も立よささうなかきね哉	七番日記(化10)
蚊柱や翌も来るなら正面へ	七番日記(化10)
蚊柱やこんな家でもあればこそ	七番日記(化10)
蚊柱やとてもの事に正面へ	七番日記(化10)
蚊柱や松の小脇の捨蚊やり	七番日記(化10)
蚊柱の穴から見ゆる都哉	七番日記(化11)
蚊柱のそれさへ細き栖かな	七番日記(化11)
蚊柱や是もなければ小淋しき	七番日記(化11)
我庵は蚊柱ばかり曲らぬぞ	七番日記(化11)
蚊柱の足らぬ所や三ヶの月	七番日記(化13)
蚊柱や月の御邪魔でないやうに	七番日記(化13)
蚊柱の三本目より三ヶの月	七番日記(政1)
蚊柱のそつくりするや畠迄	七番日記(政1)
蚊柱も一本半のかきね哉	七番日記(政1)
蚊柱も横つ倒しの小道哉	七番日記(政1)
柱事などして遊ぶ藪蚊哉	七番日記(政1)
一つ二つから蚊柱と成りにけり	七番日記(政1)
真直に蚊のくみ立し柱哉	七番日記(政1)

蚊柱や犬の尻から天窓から 八番日記(政4)  
蚊柱をにくみ崩すや角大師 文政句帖(政6)  
また、「群蠅」を詠んだ句も散見する。  
群蠅を口で追けり門の犬 八番日記(政4)  
群蠅の逃た迹打皺手哉 八番日記(政4)  
むれる蠅皺手に何の味がある 文政句帖(政6)

「蚊柱」とは、たくさんの蚊が群れになって飛んでいる  
様子が、まるで柱のように見えることで、この種の句  
は殊に『七番日記』に数を増している。

一茶が故郷に帰住したのは、文化9(1812)年11月24日  
であり、当時の心境を詠んだ句に有名な「これがまあつ  
ひの栖か雪五尺」(七番日記, 化9)がある。一茶が遺産  
分配の最終交渉を求め、故郷に移住することを決めた  
時の吟である。「ふるさは早くも五尺もの雪が降り積も  
っている」<sup>13)</sup>ということから、一茶のこれからの余生に対  
する精神的な圧力と不安が感じられる。

一茶の当時の複雑な心境は、『七番日記』の巻頭からも  
窺える。

文化九年十一月十七日出東都、廿四日至柏原、丘  
右衛門者家寄宿越年。従安永六年出旧里而漂泊卅六  
年也。日数一万五千九百六十日、千辛万苦一日無心  
楽、不知己而終成白頭翁。<sup>14)</sup>

このように、江戸漂泊36年の歳月の中でありとあらゆる  
苦勞を重ね、楽しい日が一日もなかったという一茶に  
とって、これからの故郷での生活は、不安、期待、圧力  
などのように、複雑であったことは違いない。

文化10(1813)年1月26日に、一茶は明専寺住職の調停  
で弟と和解し、亡父の遺産を相続し、経済的に安定した  
生活を送るようになる。当時一茶が詠んだ「蚊柱やこん  
な家でもあればこそ」からは、やっと一家の主になった  
喜びと達成感が感じられる。3歳にして母を亡くし、継母  
ともうまくいかず、15歳で江戸へ出た一茶にとって、自  
分の家、家族、そして親友という集団に対する憧れがい  
かに強かったかは、「蚊柱や翌も来るなら正面へ」、「蚊柱  
やとてもの事に正面へ」、「蚊柱や是もなければ小淋しき」、  
「一つ二つから蚊柱と成りにけり」などの句から充分に読  
み取れる。

一茶の蚊、蠅の句には、

蚊一ツの一日さはぐ枕かな 享和句帖(享3)  
蠅一つ打ては山を見たりけり 享和句帖(享3)  
ひとつ蚊の咽へとび込さはぎ哉 七番日記(化9)  
蠅一つ打てはなむあみだ仏哉 七番日記(化11)  
老が世ぞもう蚊が一つ鳴そむる 七番日記(化13)  
つ蚊のかはゆらしくも聞へけり 七番日記(化13)  
一つ蚊のだまつてしくりしくり哉 八番日記(政2)

人一人蠅も一つや大座敷 八番日記(政2)  
世がよくばも一つ留れ飯の蠅 八番日記(政2)  
一つ蚊の聾と知て又来たか 八番日記(政4)  
点一つ蠅が打たる手紙かな 文政句帖(政7)  
などのように、「一つ」の蚊、蠅を詠んだ句も多いが、そ  
れに対して群らがり柱のような「蚊柱」が特に多く見ら  
れるのは、栗山理一が「そこに描かれているのは自他を  
ふくめて社会の底辺にうごめく人々のなりわいの姿であ  
り、それは生活の哀歎などというよりも、もっと生な肉  
声であり、修飾を忘れた人間の表情であった」<sup>15)</sup>と指摘し  
たように、一茶の当時の放浪生活から安定した生活、円  
満な家族、集団生活に対する憧れの表れであったと考え  
られる。

#### (4) 愛着と人情味

蚊、蚤、蠅の句の出典より、蚊、蚤、蠅の句は『七番  
日記』において頗る多いということは、既に述べた通り  
である。この時期の作品には、蚊、蚤、蠅に対する一茶  
の愛着と人情味が特に強く感じられる。

帰れ蠅庵は何なと草の咲 七番日記(化10)  
さはぐなら外がましぞよ庵の蠅 七番日記(化10)  
庵の蚤不便やいつか瘦る也 七番日記(化10)  
草原や何を目当に蚤のとぶ 七番日記(化10)  
さはげさはげお江戸生れの蚤蚊なら 七番日記(化10)  
瘦蚤の達者にさはぐ山家哉 七番日記(化10)  
皺腕歩きあきてや蚤のとぶ 七番日記(化10)  
蚤とべや野べは刈萱女郎花 七番日記(化10)  
人あれば蚊も有柳見事也 七番日記(化10)  
夕されば瘦子やせ蚤脈はしや 七番日記(化11)  
草原をかせぎ廻や宿の蚤 七番日記(化11)

これらの句には、蚊、蚤、蠅を愛おしい、小さい生命  
として応援する一茶の優しい眼差しと、愛着感が窺える。

一方、文政元(1818)年に詠んだ句に、「蚤の迹かぞへ  
ながらに添乳哉」がある。この年一茶は56歳で、5月4日  
に長女さとが生まれる。したがって、この句からは、生  
まれたばかりの長女さとに対する可愛いらしさと、添え  
乳をする母親の姿が「蚤の迹かぞへながらに」という表  
現によって、より一層人情味を感じさせる。

蚊、蚤、蠅に托して、一茶の我が子に対する愛おしさ  
と人情味を浮き立たせる句は、さとが生まれた翌年であ  
る文政2(1819)年に特に多く見られる。「笠の蠅我より  
先へかけ入りぬ」においては、一茶の帰りを待っている  
妻とさとに引かれる気持ち、「笠の蠅」が「かけいりぬ」  
という表現により、その切迫感が増している。

同じ傾向の句が次にも挙げられる。

蚊の声に馴てすやすや寝る子かな	八番日記(政2)
かはいらし蚊も初声ぞ初声ぞ	八番日記(政2)
夕空に蚊も初声をあげにけり	八番日記(政2)
一日は蠅のきげんも直りけり	八番日記(政2)
親しらず蠅もしつかりおぶさりぬ	八番日記(政2)
蠅はるふのもなぐさみや子の寝顔	八番日記(政2)
人一人蠅も一つや大座敷	八番日記(政2)
とべよ蚤同じ事なら蓮の上	八番日記(政2)

このように、嫌悪の対象とされる蚊、蚤、蠅を選ぶことにより、万物を憎めない、好ましくない生き物であっても一茶にとっては愛おしい存在であるという一茶の心機と当時の一茶の幸福感が際立って読み取れる。

一方、文政4(1821)年の蠅の作に次の句がみられる。

やれ打つな蠅が手をすり足をする 八番日記(政4)

この句については様々な捉え方がある。宗左近は、この句を現実性の強い作品に捉え、「手をすり足をするあたりまえの蠅の動作が、蠅のものでありながらもそこを離れて、同時に人間の動作になる。そして、人間の動作になりながらも、なお、蠅の動作であることをやめない。つまり、言葉だけの表面の比喻であることを超えて、蠅と人間の合体した新しい第三者の、しかも、ありありと蠅と人間のものである心情の、そのぬきさしならない表現となる」<sup>16)</sup>と、解いている。それに対して、金子兜太は一茶の身体にあるアニミズムと捉え、「蠅に同じ生きものとしての、まるで自分の分身のような、親身なものを感じている」<sup>17)</sup>と受け止めている。

一茶は文政3(1820)年10月、58歳の時に雪道で転んで中風を発病する。そして、その後回復はするが、文政4(1821)年1月に次男石太郎が窒息死でなくなる。このような状況を考えると、宗左近における蠅と人間の合体という見方も、金子兜太における同じ生き物としての分身の見方も、「手をすり足をする」蠅のしぐさから、一茶の心の投影、共感を呼んだことには一致していると言える。

このように、蚊、蚤、蠅に対する一茶の愛着は彼が柏原に定住してから特に多くみられ、そこには小さい生命に対する一茶の優しい気持ちと、そこに投影された一茶自身の境遇が推察できるのである。

#### 4. 一貫した一茶の思想

一茶の発句には蚊、蚤、蠅などの小動物を詠んだ句が特に多いことは、今回の調査から裏付けられる。その理由についてかつて高井蒼風は、

一茶が小動物に深い愛情をそそいだのは、一茶の

家が代々浄土真宗の熱心な信者であったことによる。彼が少年時代から母なし子の継子育ちで、生涯を輾轉不遇の恵まれない家庭に身をおいたことで、薄倖なものをすべて同情視したことにもよるが、一生を通じて純真なナイーブな感情と、新鮮な感覚をもった児童のような、自由奔放な直感力をもって、生あるもののすべてを見ていたからであろう。<sup>18)</sup>

と、一茶が小動物に対して殊に愛着を持っているのは、彼の生まれ育った環境によるものであり、すべての生き物に対する同情心があったからであると指摘している。

しかし、蚊、蚤、蠅に托した一茶の作品世界からわかるように、そこには生き物に対する一茶の同情心も表れるが、その中には蚊、蚤、蠅に托した一貫した一茶の思想があると考えられる。

一茶は3歳で母を無くし、祖母に育てられた。『おらが春』には次のような一節がある。

「親のない子はどこでも知れる、爪を啜へて門に立。」と子どもらに唄はるるも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に木・萱など積たる片陰に踞りて、長の日をくらしぬ。我身ながらも哀也けり。<sup>19)</sup>

一茶の幼少時代を追憶して書いた俳文で、母を無くし、子供達に虐げられ、孤独な環境の中で過ごす一茶の憐れみが窺える。そして、追憶の作とはいえ、「我と来て遊べや親のない雀」のように、雀を初めとする小動物に目を向けるようになったと考えられる。その中でも蚊、蚤、蠅は農村で育った一茶にとっては、極めて身近な存在であり、世間に嫌がられる存在同士として共感するところがあり、親しみを感じたのであろう。

前述したように、一茶が「蚊一ツの一日さはぐ枕哉」、  
「人一人蠅も一つや大座敷」などのように、一茶が「一つ」の蚊、蠅を限定して詠んだのは、一茶の孤独な心境を反映するためであったと考えられる。

明和九年五月十日、後の母男子仙六を生めり。此時信之は九歳になんなりけり。いたましい哉、此日より信之、弟仙六の抱守りに、春の暮おそきも、はこによだれに衣を絞り、秋の暮はやきも、ばりに肌のかわくときなかりき。仙六むづかる時は、わざとなんあやしめるごとく父母にうたがはれ、杖のうきめ当てらるる事、日に百度、月に八千度、一とせ三百五十九日、目のはれざる日もなかりし。馮と思ふは老婆一人介となり給ふに餓鬼の地藏を見つけたるがごとく、あやふき難はのがれたり。<sup>20)</sup>

これは、一茶が『父の終焉日記』の「日記別記」に綴った一段である。一茶は8歳の時、継母を迎え、9歳で弟



の仙六が生まれてからは弟の面倒を任せられ、自由のない少年期を送っていた。この日記からは、一茶の継母に対する深い恨みが窺える。

その後、一茶は14歳で頼りにしていた祖母に死なれ、翌年江戸へ向って放浪生活を始めるが、『七番日記』の巻頭で示したように、36年の歳月においても楽しい日が皆無の生活を送っていたのである。また、

きどあい楽、あざなへる縄のごとく、あへば別る世の中、今更おどろくべき事にあらねど、今迄は父をたのみに古郷へは来つれ、今より後は誰を力にながふべき。心を引さるる妻子もなく、するすみの、水の泡よりもあはく、風の前のちりよりもかるき身一つの境界なれど、只きれがたきは玉の緒なりき。<sup>21)</sup>

のように、今まで父を頼りにしていたが、父を亡くし、頼りのない世の中をこれから一人でどう生きるべきか、という不安と孤独、そして生命に対する尊さが、『父の終焉日記』から読み取れる。

一茶は51歳でとうとう故郷に安住するが、「五十にして都の蚊にも喰れけり」、「蚤蠅にあなどられつつけふも暮ぬ」、「故郷は蠅すら人をさしにけり」、「庵の蚤子どもに迄もとられけり」などの句から、世間から嫌悪される思いと孤独感は、故郷に帰ってからさらに深く感じられたことが窺える。

このように、幼少時代から周囲に嫌がられ、継母に虐待され、その中で身にしみる孤独感、葛藤する自分自身の姿を、まるで人間と同じ空間で生存しつつ、人間に憎み嫌われ、生命の尽きるまでもがきながら生きる蚊、蚤、蠅にみたと考えられる。

つまり、一茶は生活の苦悩、人生の喜怒哀楽を蚊、蚤、蠅に托して、自分自身の感懷を表白し、17文字の俳句の中に詠出している。彼は、行脚時代の自分を「通し給へ蚊蠅の如き僧一人」といい、旅先での女性に対する思いを「蚊を焼くや紙燭にうつる妹が顔」といい、旅修業の時は「戸迷や蚊の声さぐる木賃宿」といい、田舎の閑寂した状況を「蚊一ツの一日さはぐ枕哉」といっている。そして、家族への憧れを「蚊柱やこんな家でもあればこそ」といい、最愛の妻子に対する愛おしさを「蚤の迹かぞへながらに添乳哉」、「笠の蠅我より先へかけ入りぬ」と表している。蚊、蚤、蠅の句には、常に一茶の人生に対する深い思いが映し出され、その奥底には一茶の人生の寂寥が滲み出ている。

金子兜太は、一茶の「農民的感性」から一茶のアニミズムを捉え、その中にあるのは、

小生物との同体感であって、だから、それらの動

作をたんねんに　まるでわがことのように観察し、呼びかけ、冗談まじりに激励したりするのである。慈悲などという倫理の世界にはいるまえの、素肌の親しみといったらよい。お互いの＜精霊＞の共感といういいかたもできようか。<sup>22)</sup>

とのように、一茶にみるアニミズムは、耕作農民という育った環境の中で自然に生え始めた感性によるものであり、それによって小生物との同体感、親しみ、共感を呼び起こしたのであると指摘している。

以上をまとめると、蚊、蚤、蠅に托した一茶思想の根底には、まるで蚊、蚤、蠅のように、家庭や世間に虐げられ、蚊蠅のように、人生を彷徨する自分自身の姿が常にあった。そして、それは一茶の処した境遇により、時には美しく、時には淋しく映し出されるのである。蚊、蚤、蠅は、一茶にとって世間一般に嫌がれる者同士が共に生きる存在であり、同じ運命を持って生きる最も重要な存在であったと考えられる。

## おわりに

本稿では、先行研究において一茶の虫の句の中で、小動物を詠んだ句、特に嫌悪の対象とされる蚊、蚤、蠅の句が多いことを句数の集計によって検証し、それに托した一茶の作品世界について考察を加えた。

本研究を通して、蚊、蚤、蠅という句材は、一茶が俳諧の世界に入った時にはあまり注目されていなかったが、故郷に帰住してから特に一茶に意識され、多く詠まれていたことがわかった。一茶が特に嫌悪の対象とされる蚊、蚤、蠅を多く詠んでいるのは、生まれ育った環境と自身の境遇により、常に感じる共感があるからであり、そこには蚊、蚤、蠅に托した一茶自身の姿と当時の心情が込められていた。つまり、一茶にとって蚊、蚤、蠅は共に生きる存在であり、同じ運命を持って生きる最も重要な存在であったと考えられる。

## 注・参考文献

- 1) 栗山理一・日本詩人選19・小林一茶・筑摩書房、1975、p.90.
- 2) 金子兜太・小林一茶　＜漂鳥＞の俳人・講談社、1980、p.183.
- 3) 金子兜太・一茶句集・岩波書店、1996、p.229.
- 4) 小林計一郎・丸山一彦・宮脇昌三・矢羽勝幸・一茶全集第一巻発句・信濃毎日新聞社、1993.
- 5) 大谷篤蔵・中村俊定・芭蕉句集・岩波書店、1974.

- 6) 尾形仂・森田蘭・蕪村全集第1巻発句・講談社, 1992.
  - 7) 丸山一彦・一茶七番日記・下・岩波書店, 2003, p.472-475.
  - 8) 丸山一彦・一茶俳句集・岩波書店, 2009, p.373.
  - 9) 前掲2), p.44.
  - 10) 丸山一彦・新訂俳句シリーズ人と作品3・小林一茶・桜楓社, 1979, p.79.
  - 11) 北小路健・一茶の日記・立風書房, 1987, p.169.
  - 12) 矢羽勝幸・一茶父の終焉日記・おらが春・他一篇・岩波書店, 1992, p.49-50.
  - 13) 麻生磯次・俳句大観・明治書院, 1971, p.339.
  - 14) 丸山一彦・一茶七番日記・上・岩波書店, 2003, p.17.
  - 15) 前掲1), p.147.
  - 16) 宗左近・小林一茶・集英社, 2000, p.126.
  - 17) 前掲2), p.182.
  - 18) 高井蒼風・俳諧寺一茶の芸術・行政通信社, 1978, p.228.
  - 19) 前掲12), p.156-157.
  - 20) 前掲12), p.64.
  - 21) 前掲12), p.58-59.
  - 22) 清水孝之・栗山理一・鑑賞日本古典文学第32巻蕪村・一茶・角川書店, 1976, p.450.
- (平成24年9月25日受付)  
(平成24年12月20日採録)